

史學要

大日本教育協會新編			
一	四		三
六册	號	架	函

本草

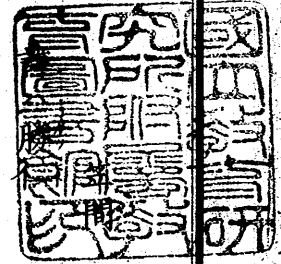
K/102
3.1
8

東 壽 庵



要卷之八

後柏原天皇



明治九年圖書局交付

棚谷元善 編輯

後柏原天皇第一ノ皇子也、母ハ准后源氏、○十月、天皇
 藤原冬良關白タリ、○文龜元年、義植周防ニ在テ
 ム、義澄之ヲ聞テ、奏ノ其官爵ヲ削ル、○永正元年、
 杉原良接ヲ北條早雲ニ請ヒ、上杉頭定ト立河原ニ戰
 テ敗ル、明年、朝良使ヲ頭定ニ遣ハシ、曰、我カ族連年兵ヲ
 構ヘ、國內疲弊シテ、早雲其隙ヲ窺ヒ、關東ヲ蚕食ス、今ヨ
 リ公ト吾トカヲ合セテ、之ヲ防クニ如カスト、頭定之ニ

後柏原

從フ是ヨリ兩上杉氏連和ノ北條ヲ防ク長氏髮ヲ削テ
早雲ト稱ス○三年長尾爲景其主上杉房義ヲ兩溝ニ攻
テ之ヲ弑ス房義ハ頭定ノ弟ナリ○四年六月細川政元
ノ家宰香西元近政元ヲ弑シ澄之ヲ立ツ初ノ政元魔神
ノ法ヲ修メテ婦人ヲ近ケス故ヲ以テ子無シ藤原政基
ノ子澄之ヲ養ヒ又族政春ノ子高國ヲ養フ皆意ニ稱ハ
ス更ニ族義春ノ子澄元ヲ養フ澄元猶幼ニノ阿波ニ在
リ三好長輝之ヲ輔ク於是元近藥師寺與次ト議ノ曰澄
元嗣ト爲テ長輝權ヲ執ルトハ我輩皆其下ニ立タン速
ニ大事ヲ行ヒ澄之ヲ立ルニ如カシト因テ近士福井戸

倉等ニ賂テ之ヲ圖ラシム是月政元齋戒ノ夜ル浴室ニ
入ル戸倉次郎之ヲ双ス乃チ澄之ヲ立ツ三好長輝阿波
ニ在テ之ヲ聞キ兵三千ヲ發シ澄元ヲ奉メ京師ニ入ル
元近之ヲ嵐山ニ距ム軍敗レ元近與次戸倉等皆死シ澄
之モ害セララル長輝乃チ澄元ヲ管領トナサント請フ義
澄之ヲ許ス長輝後チ髮ヲ削テ希雲ト稱ス○五年正月
大内義興京師ノ變ヲ聞テ大ニ喜ヒ山陰山陽西海ノ兵
ヲ舉ケ故將軍義樹ヲ奉メ東ニ上ル細川高國兵ヲ舉テ
之ニ應ス義澄畏レテ書ヲ高國ニ與ヘテ和ヲ請フ高國
聽カス三月義澄近江ニ奔テ六角高賴ニ依リ澄元長輝

亦タ阿波ニ奔ル、四月、義植義興界浦ニ至ル、先是畠山尚
長攻テ畠山義豊ヲ殺シ、數々政元ト戰フ、是ニ至テ義植
ニ屬ス、義植義興京師ニ入ル、已ニノ三好長輝、兵ヲ舉テ
攝津ニ入り、六角定頼ト夾テ京師ヲ攻メ、大ニ敗レ、其子
長則、長光等ト、知恩寺ニ入テ自殺ス、定頼兵ヲ引テ還ル、
○七月、義植再々征夷大將軍ニ任シ、義澄カ官爵ヲ削リ、
義興ヲ以テ管領ト爲ス、○六年十月、夜、盜アリ幕府ニ入
テ、義植ヲ刺ントス、義植刀ヲ拔テ手ツカラ四人ヲ斬リ、
身亦タ九創ヲ蒙ル、蓋シ義澄ノ黨ノ所爲ナリト云、○七
年、將軍義植、自ラ將トシ、六角定頼ヲ伐ツ、利アラズ、歸ル、

○是歲六月、上衫顯定、兵ヲ率テ長尾爲景ヲ討チ、弟義房
カ仇ヲ報セントス、長森原ニ戰ヒ、兵敗レテ死ス、其養子
憲總嗣テ管領ト爲ル、○八年八月、前大將軍義澄、近江ノ
岳山ニ薨ス、子二人有リ、長ヲ義晴、次ヲ義維ト曰フ、義晴
ヲ赤松義村ニ託シ、義維ヲ細川澄元ニ托ス、是月、細川政
賢、南海東海ノ兵ヲ將テ入テ、義植ヲ攻ム、義植大内義興
ノ策ヲ用テ、之ヲ丹波ニ避ケ、政賢ヲ誘テ京師ニ入レ、已
ニノ兵ヲ聚メ、還テ政賢ト舟岡山ニ戰テ大ニ之ヲ破リ、
政賢ヲ斬ル、義興ノ功ヲ奏メ、從三位ニ叙ス、○九年八月、
北條早雲、三浦義同ヲ伐テ之ヲ破ル、初メ義同、其義父三

浦時高ヲ弑シテ新井城ニ據リ、後岡崎城相州ニ居ル
早雲其不義ヲ惡テ常ニ之ヲ討滅セント欲ス、是ニ至テ
俄ニ兵ヲ發シ岡崎ヲ襲テ之ヲ拔ク、義同走テ住吉城ヲ
保ツ、後ニ早雲又鎌倉ニ戰テ大ニ之ヲ破ル、義同退テ新
井城ヲ保ツ、早雲長圍ヲ築テ之ヲ攻ム、上杉朝興兵ヲ率
テ義同ヲ援ク、早雲兵ヲ分チ甘繩ニ邀ヘ撃テ之ヲ破ル、
城中益々困ス、○十年三月、將軍義植六角定頼ヲ伐チ敗
レテ還ル、○十三年七月、北條早雲、新井城ヲ陥ル、長氏新
井城ヲ圍ム、累年、已ニノ城中食竭ク、義同ノ諸將上總
ニ走テ再舉ヲ圖ラン、勸ム、義同日我カ父時高持氏

ニ叛テ鎌倉ヲ滅シ、吾レ又タ父ヲ弑ス、積惡ノ報、安クニ
往テ逃レンヤト聽カス、是ニ至テ城陥リ奮戰ノ死ス、其
子義意、荒次郎ト稱ス、驍勇絶倫、丈餘ノ鐵槌ヲ提ケテ縱
横奮撃、數十人ヲ殺シ自刎ノ死ス、年二十一、早雲盡ク相
摸ヲ略ス、○十五年、蝦夷乱ヲ作ス、蛸崎光廣討テ之ヲ平
ラク、光廣ハ其先武田氏若狹ノ人ナリ、父信廣始テ松前
ニ來リ、乱ヲ平ラケテ功アリ、上國ノ城主、蛸崎修理太夫
女ヲ以テ之ニ妻ハス、因テ蛸崎ヲ冒シ、後チ上國ノ城主
タリ、光廣ハ信廣ノ子ナリ、後チ松前ヲ治メ、漸ク疆域ヲ
開拓ス、○八月、大内義興、管領ヲ辞シ周防ニ還ル、久ク京

師ニ居リ費用丈ヘサルヲ以テナリ、時ニ朝貴ノ諸臣、衣食給セス、多ク義興ニ從テ周防ニ往ク、細川高國代テ管領ト爲リ政ヲ專ニス、○十六年八月、北條早雲卒ス、氏綱等ニ遺言メ、必ス八州ヲ取シム、又法訓二十一條ヲ定テ將士ニ頒ツ、早雲曾テ儒士ヲメ、三略ヲ讀シメテ之ヲ聽ク、其首ニ曰、主將ノ法ハ、務テ英雄ノ心ヲ攬ル、早雲即チ曰、此一言ニメ足ルト、卷ヲ掩テ復タ讀マシメス、其英明此ノ如シ、子氏綱立ツ、氏綱英略父ノ如ク、善ク兵ヲ用ウ、○十七年二月、細川澄元阿波ニ在テ、義興ノ京師ヲ去ルヲ聞テ大ニ喜ヒ、三好元長ト兵ヲ發シ、攝津ニ至ル、細川

高國拒戰ノ大ニ敗レ、近江ニ走ル、己ニノ六角定頼ト兵ヲ合シ、還テ京師ヲ攻テ、大ニ元長ヲ破ル、元長澄元ト共ニ走テ阿波ニ歸ル、澄元尋テ卒ス、元長ハ長輝ノ孫ナリ、後髮ヲ削テ海雲ト稱ス、○大永元年三月、即位ノ禮ヲ行フ、應仁以後朝廷衰弊レ、大禮行ハレサル者二十年、本願寺ノ僧光兼其資ヲ獻シ、因テ儀ヲ成ス、光兼ヲ賞シ、准門跡ト爲ス、法親王ニ准スルナリ ○是月、細川高國將軍義植ヲ逐ス、先是義植、高國ノ專横ヲ厭ヒ、畠山植長ヲ以テ之ニ代ントス、高國聞テ大ニ怒リ、數々義植ニ逼ル、義植禍ヲ恐レテ遂ニ淡路ニ奔ル、後二歳ニノ薨ス、○六月、高國故將軍

義澄ノ子義晴ヲ播磨ニ迎フ、七月、義晴征夷大將軍ニ任
ス、時ニ年十一、○九月、浦上村宗、其主赤松義村ヲ弑ス、○
四年正月、北條氏綱、兵ヲ發シ、上杉朝興ヲ攻ム、朝興之ヲ
高繩ニ邀ヘ、撃テ大ニ敗レ、退テ江戸城ヲ守ル、氏綱急ニ
攻テ之ヲ抜ク、朝興走テ河越ヲ保ツ、氏綱從テ之ヲ攻ム、
未タ下ラズ、乃チ守ヲ江戸城ニ置テ還ル、○六年四月七
日、天皇崩ス、壽六十三、

○後奈良天皇 諱ハ知仁

後柏原天皇第一ノ皇子也、母ハ豊樂門院藤原氏、○四月、
天皇踐祚ス、藤原植家關白タリ、○七年二月、先是細川高

國讒ヲ信シ、其宰香西光重ヲ殺ス、其弟柳本賢治等、兵ヲ
起シ、高國ニ叛キ、京師大ニ乱レ、將軍義晴坂本ニ奔ル、三
好元長、阿波ニ在テ之ヲ聞キ、細川澄元ノ子聰明五郎ヲ
奉シ、兵ヲ發シ、堺浦ニ至ル、高國之ヲ聞テ、援ヲ若狹近江
越前ノ諸將ニ請フ、朝倉孝景來リ、援ス、是月、三好元長、京
ニ入ル、高國之ヲ桂川ニ逆ヘ、撃ツ、元長兵ヲ三隊ニ分チ、
流ヲ乱テ來リ攻ム、孝景横ニ之ヲ撃チ、元長ノ兵敗レ、走
ル、元長遂ニ兵ヲ收テ、阿波ニ還リ、三月、又大舉シテ、界浦
ニ至リ、連リニ諸城ヲ下シ、聰明五郎ニ冠ヲ加ヘ、晴元ト
稱シ、奉シ、堺城ニ據ル、○享祿元年正月、高國使ヲ遣テ和

ヲ晴元元長ニ請フ、元長佯テ之ヲ許ス、諸將ノ高國ヲ接
クル者皆國ニ還ル、元長間ニ乘ノ高國ヲ攻ントス、高國
驚テ且ツ恐レ、遂ニ出テ奔リ、北畠朝倉六角ノ諸氏ニ至
ル、諸氏皆之ヲ禮セシ、遂ニ備前ニ往テ、浦上村宗ニ依ル、
村宗正ニ其主ヲ弒シ、諸侯ニ列センコトヲ希フ、因テ之ヲ
納レテ深ク相結トス、將軍義晴亦タ乱ヲ避テ近江ノ朽
木ニ奔リ、佐々木植綱ニ依ル、○三年春、清原良雄、敕使ト
メ朽木ニ赴キ、就テ義晴ヲ大納言ニ任シ、從三位ニ叙ス、
○四年六月、細川高國備前ニ在テ、浦上村宗ト兵ヲ合シ
來テ細川晴元ヲ攻ム、而シテ赤松ノ遣臣、皆村宗ノ逆ヲ惡

シ、赤松晴村ヲ擁ノ兵ヲ起シ、款ヲ晴元ニ通ス、村宗ノ兵
多ク叛テ之ニ屬ス、此月、三好元長、晴元ヲ奉リ、高國ト天
王寺ノ側ニ戰テ、大ニ之ヲ破リ、村宗ヲ殺ス、高國逃レテ
尼崎ニ走リ、染戸ノ麿中ニ匿ル、元長ノ追兵獲テ之ヲ殺
ス、○天文元年夏、晴元其宰三好元長ヲ殺ス、先是元長ノ
叔父三好宗三、政長元長ノ專權ヲ嫉ミ、晴元ノ寵臣、木澤
長政、柳本彈正ト相結ビ、俱ニ元長ヲ譖ス、是ニ至テ元長
柳本ノ子某ヲ殺ス、晴元聞テ大ニ怒ル、元長乃チ髮ヲ削
テ之ヲ謝シ、海雲ト稱ス、晴元怒リ未タ釋ケス、遂ニ木澤
長政三好宗三ヲ遣テ、本願寺ノ僧徒ヲ誘ヒ、海雲ヲ頭木

寺ニ圍ム、海雲其妻ヲノ子千熊後長慶ヲト稱ス携テ、阿波ニ逃
 レシノ遂ニ自殺ス、木澤長政、遂ニ其舊主畠山義宣ヲ弑ス、
 ○二年春、將軍義晴、京師ニ還リ、細川晴元ヲ管領ト爲ス、
 ○三年、時ニ九州擾乱シ、互ニ相侵奪ス、大内義隆ニ詔ノ
 之ヲ討平セシム、義隆兵ヲ發ノ之ヲ征シ、原田秋月、菊池
 少貳等皆降ル、義隆ノ功ヲ賞ノ從四位下ニ叙ス、○五年
 二月、即位ノ禮ヲ行フ、大内義隆資ヲ献ス、功ヲ以テ太宰
 ノ大貳ト爲リ、山陽鎮西ノ事ヲ領ス、○六年七月、北條氏
 綱河越城ヲ攻テ之ヲ取ル、先是上杉朝興已ニ死シ、其子
 朝定遺命ヲ奉ノ武藏ヲ圖ル、乃チ深大寺ノ城ヲ修テ氏

綱ヲ挑ム、氏綱之ヲ顧ミズ、兵ヲ率テ直チニ河越ニ赴キ、
 城ヲ距ル五十餘町ニ陣ス、朝定大ニ驚テ返リ救フ、時
 ニ七月十五夜、西軍月下ニ戰フ、氏綱終ニ大ニ朝定ヲ破
 ル、朝定走テ松山ノ城ニ入ル、○七年五月、武田晴信、其父
 信虎ヲ逐テ、甲斐ニ自立ス、初ノ信虎、其次子信繁ヲ愛シ、
 晴信ヲ廢スルノ志有リ、晴信深ク自韜晦シ、諸將皆以テ
 不慧ト爲ス、先是五年十月信虎信州海野口ノ城ヲ攻ム、城
 堅ノ拔ケス、且ツ大ニ雪フル、信虎圍ヲ解テ去ル、晴信殿
 下請ヒ、黎明兵三百ヲ以テ還テ城ヲ襲ヒ、一舉ノ之ヲ拔
 キ、城將平賀源心ヒラガゲンシンヲ斬ル、時ニ年十六、諸將皆驚キ、始テ其

智勇ニ服ス、然レ信虎其功ヲ賞セス、信虎狂暴ニノ國人
之ヲ苦ム、晴信陰カニ飯富兵部、板垣信形ト謀リ、深ク今
川義元ニ結フ、義元亦夕信虎ノ悍ニノ制シ難キヲ患ヒ、
潛カニ晴信ヲ助ク、是月、信虎、晴信ヲ駿河ニ逐ント欲シ、
自ラ駿河ニ往テ義元ニ謀ル、義元乃チ信虎ヲ留テ返サ
ス、晴信遂ニ甲斐ニ自立ス、諸宿將皆首ヲ俯ノ命ヲ聽ク、
○十月、北條氏綱兵ヲ發ノ足利義明ヲ攻ム、里見義弘、安
房上總ノ兵ヲ以テ義明ヲ援ク、氏綱、鴻臺ニ戰テ、大ニ之
ヲ破リ、義明、飛箭ニ中テ死シ、義弘、安房ニ走ル、義明ハ足
利政氏ノ次子、高基ノ弟ナリ、下總御弓ニ居リ、御弓御所

ト稱シ、兵力頗ル張ル、高基之ヲ忌ム、氏綱ニ請テ之ヲ圖
ラシムルナリ、○八年、大將軍義晴出テ、八瀬ニ居リ、朽
木植綱ニ依ル、三好氏ノ餘黨ヲ避ルナリ、○九年夏、尼子
晴久、毛利元就カ、叛テ大内氏ニ附クヲ怒リ、騎卒五萬ヲ
率テ吉田城ヲ攻ム、城兵僅カニ三千人、數ク擊テ之ヲ卻
ク、大内義隆、其將陶晴賢ヲ遣テ之ヲ救フ、晴久敗レテ退
ク、晴久ハ塩冶高貞ノ裔ニノ世々出雲ニ居リ、山名衰ル
ニ及テ勢稍強大ナリ、元就ハ大江廣元ノ裔ニノ世々安
藝ニ居リ、吉田城主タリ、○十一年八月、今川義元、織田信
秀ト小豆坂ニ戰ヒ敗レテ還ル、○十二年春、大内義隆、大

舉ノ富田城ヲ攻ム、尼子晴久固ク守テ出ズ、義隆ノ兵戰
ヲ挑ミ、蟻附ノ城ニ登ル、晴久其備無キヲ伺ヒ、二子義久
倫久ト精兵ヲ率テ門ヲ開テ之ヲ擊ツ、義隆ノ兵潰走ス、
晴久勝ニ乘ノ追撃ス、元就殿ノ之ヲ拒久、晴久乃チ退キ
去ル、○八月、波爾杜瓦爾ノ人、百餘人、大艦ニ乘ノ種島ニ
來ル、言語通ヒス、明人其中ニ在リ、沙ニ畫ノ互市ヲ求ル
ヲ云、又鳥銃ヲ齎ス、島主時堯之ヲ購ヒ、人ヲノ學ハシム、
大友義鑑之ヲ喜ヒ、大ニ鍛エラ會ノ其製ヲ廣ム、伊豫ノ
河野氏益、其精ヲ究ム、是ヨリ遂ニ天下ニ遍シ、或ハ曰
天文九年、東國ノ道士大峯ニ詣ル者、鳥銃ヲ界浦ノ市ニ

獲テ、歸テ之ヲ北條氏綱ニ獻ス、氏綱益々銃工ヲ召ノ之
ヲ製スト、或ハ天文七年始テ之ヲ得ト、年月齟齬ス、孰レ
カ是ナルヲ知ズ、此時又天主教ヲ傳フ、後ニ大友義鑑之
ヲ崇奉シ、其法浸ク盛ナリ、○十五年四月、北條氏康、上秋憲
政、上秋朝定ト、河越ニ戰テ大ニ之ヲ破ル、先是氏綱卒ス、
氏綱容良魁傑、善ク兵ヲ用ウ、氏康之ニ嗣テ、亦英略アリ
父祖ニ減セス、河越城ノ敵衝ニ當ルヲ以テ、衆ニ撰テ北
條綱成ヲ舉ゲ、三千騎ヲ授テ之ヲ守ラシム、綱成驍勇、其
旗黄色ヲ用非、八幡ノ二字ヲ書ス、八州ノ士、黃八幡ノ名
ヲ知ラサル者無シ、是ニ至テ兩上秋氏、大舉ノ小田原ヲ

攻ム其意必ス之ヲ取ルニ在リ、河越ニ至テ之ヲ圍ム
數重、又使ヲ古河ニ遣テ晴氏ヲ請フ、晴氏衆ヲ盡シ來リ
助ケ、攻戰歲ヲ踰ユ、綱成大敵ニ屈セス、衆ヲ勵マシ固ク
守ル、時ニ氏康ノ兵諸城ヲ守リ、在ル者僅カニ八千人、氏
康自ラ將トノ赴キ援ント欲ス、而シテ兩上校氏晴氏ノ兵
ヲ并セテ八萬騎、衆寡懸絶ス、氏康乃チ驕ラシ之ヲ擊シ
テ謀リ、佯テ降ヲ乞フ聽カス、又怯ヲ示シ、出テ、入間
河ノ南ニ至リ、敵ヲ見レハ即走ル、數ク出テ、數、走ル
敵終ニ氏康ヲ侮テ復々備ヲ設ケス、氏康謀ゾ盡ク之ヲ
知り、乃チ其兵ヲ白布ヲ鎧上ニ被ラシメ、令ノ曰、白ナラ

サル者ハ之ヲ斫レ、首ヲ取ルテ勿レ、兩校ヲ斃ス此一戰
ニ在リ、卿等其レカヲ協セテ之ヲ勉メ、乃チ兵ヲ引テ入
間河ヲ渡リ、夜半直チニ上校ノ軍ヲ衝ク、軍大ニ驚テ潰
乱ス、氏康ノ兵之ニ乘シ縱橫奮撃、一皆百ニ當リ、大ニ之
ヲ破リ、二萬餘人ヲ殺傷ス、晴氏憲政等皆走リ、朝定ヲ虜
ニシ、即時ニ兵ヲ收テ松山城ニ入ル、天明上校ノ諸將氏
康ノ兵寡キヲ聞テ大ニ悔ヒ、返テ川越ニ至テ再戰ヲ議
ス、衆論紛紜、綱成之ヲ伺ヒ知リ、門ヲ開テ突テ出ツ、敵軍
駭テ曰、黃八幡出ツト、大ニ敗走ス、綱成松山ニ往テ戰捷
ヲ賀ス、氏康大ニ綱成カ守戰ノ功ヲ賞ス、於是氏康ノ威

關東ニ震フ。○冬、將軍義晴職ヲ罷メ、其子義藤征夷大將軍ニ任ス。時ニ義晴京師騷擾ナルヲ以テ、其子ヲ携テ坂本ニ赴キ、日吉祠官ノ家ニ於テ加冠ノ禮ヲ行フ。尋テ大納言兼秀ヲ敕使トナシ、就テ義藤ヲ征夷大將軍ニ拜ス。義藤後ニ名ヲ義輝ト改ム。初メ細川氏綱高國ノ子ノ兵ヲ河内ニ起シ、畠山政國、游佐長教等之ニ應ス。晴元之ヲ聞テ、三好宗三ヲ遣テ之ヲ撃ツ。克タス。義晴、晴元ノ專ヲ忌ミ、陰カニ氏綱ヲ助ケテ、管領タラシメテ許ス。晴元之ヲ覺リ、是ニ至テ六角定頼ト義晴ヲ攻メトス。故ニ義晴出テ、坂本ニ避ケ、職ヲ義輝ニ讓ル。○十六年三月、將軍父子

出テ、北白河城ヲ保ツ。晴元等カ兵ヲ避ルナリ。四月、晴元四國ノ兵ヲ率テ來リ、火ヲ各所ニ放ツ。七月、晴元定頼又來リ攻ム。城中支ルヲ能ハス。義晴、義輝城ヲ焚テ坂本ニ走ル。尋テ和ヲ講メ、京師ニ還ル。晴元管領故ノ如シ。○十七年、大内義隆從二位ニ進ム。義隆七國ノ守護ヲ領シ、意稍ク驕恣、和歌茶譙ヲ好ミ、軍國ノ事ヲ恤ヘス。公卿乱ヲ避ル者皆山口ニ來ル。義隆遂ニ帝都ヲ其國ニ遷サン。ト欲シ、新タニ坊里ヲ制シ、三條九陌ヲ開キ、壯麗ヲ極ム。識者以テ衰乱ノ兆ト爲ス。○十八年三月、先是三好長慶晴元ノ召ニ應メ、阿波ヨリ來リ、數ク氏綱政國ト戰ス。長

慶ハ海雲ノ子ナリ、故ニ三好宗三カ其父ヲ讒殺スルヲ
怨ム、是ニ至テ又已レテ譖スルヲ憤リ、遂ニ氏綱ニ應メ
游佐長教等ト、宗三カ中嶋ノ城ヲ攻テ之ヲ取ル、宗三走
テ榎並城ヲ保チ、榎ヲ晴元ニ請フ、晴元乃チ三宅城ニ據
テ之カ應援ヲ爲ス、六月、長慶其弟十河一存ト共ニ、榎並
三宅ノ二城ヲ攻テ之ヲ拔キ、宗三ヲ斬ル、晴元走テ京師
ニ歸リ、遂ニ義晴、義輝ヲ挾テ坂本ニ走ル、○是歲、尾張ノ
織田信秀卒シ、子信長嗣ク、始メ吉法師ト稱ス、信長幼ニ
メ、谿達武事ヲ喜ヒ、大刀ヲ帶フ、放縱ニシテ行檢ヲ修メス、
其傳平手政秀數ク之ヲ諫ム、聽カス、政秀書ヲ作テ之ヲ

切諫シ、遂ニ自殺ス、信長感泣シ、爲ニ佛寺ヲ建テ、政秀
寺ト稱シ、自ラ矢テ曰、吾今ヨリ過テ改メ行ヲ勵マシ、大
功ヲ天下ニ立テ、政秀カ恩ニ報ス可シト、益々武事ヲ
講究ス、○十九年三月、晴元坂本ニ在テ、長慶カ來リ攻シ
トスルヲ聞キ、如意山ニ城テ、義晴ヲ奉セントス、義晴病
テ穴アノ太山中ニ薨ス、晴元定頼、遂ニ義輝ヲ奉メ寶泉寺ニ
徙ル、○十一月、長慶京師ニ入テ、火ヲ東山ニ縱テ、進テ大
津松本ニ至ル、○二十年七月、晴元進テ相國寺ニ陣ス、長
慶攻テ之ヲ焚ク、晴元支ヘス、義輝ヲ挾テ朽木ニ奔ル、○
是月、北條氏康、八州ノ兵ヲ率テ、上杉憲政ヲ撃チ、平井城

ヲ攻テ之ヲ破ル、憲政窮蹙シ、遂ニ越後ニ奔テ、長尾景虎ニ依リ、之ニ謂テ曰、我家八州ノ管領タルヲ、茲ニ十二世今氏康ノ爲ニ破ラル、故ニ舊怨ヲ捐テ、來リ、歸ス、願クハ卿吾カ爲ニ氏康ニ報セヨト、景虎之ヲ諾ス、憲政囚テ其職号ヲ授ケ、約ノ父子ト爲ル、於是景虎上執氏ヲ稱ス、管領ノ職ハ辭ソ未タ受ケス、○九月、陶晴賢其主大内義隆ヲ弑ス、義隆武事ヲ捐テ、宴詠ヲ事トス、晴賢諫シ、死聽カス、又義隆ノ嬖臣相良武任ト推テ、争テ隙アリ、武任數々之ヲ譖シ、義隆遂ニ晴賢ヲ疏ニス、晴賢之ヲ怨テ、其邑ニ歸リ、疾ト稱ソ出テス、密カニ反ヲ謀ル、家臣等諫レ

死聽カス、八月、兵ヲ率テ山口ヲ襲フ、城兵皆潰エ、義隆出テ走リ、航ノ筑紫ニ赴ク、風ニ阻テラレ、還テ大寧寺ニ入ル、賊兵來リ圍ム、義隆自殺ス、関白尹房以下公卿十餘人皆害ニ遇フ、晴賢大友義鎮ノ弟、義長ヲ迎テ主ト爲シ、自ラ威權ヲ恣ニシ、髮ヲ削テ全姜ト稱ス、○二十一年春、將軍義輝、三好長慶ト和シ、京師ニ還ル、細川氏綱ヲ以テ管領トナシ、晴元ヲ罷ム、晴元髮ヲ削テ丹波ニ逃ル、皆長慶ノ請ニ従フナリ、是ニ於テ三好氏、細川ニ代テ京畿ノ政ヲ執ル、長慶其宰松永久秀ヲ留テ南ニ還ル、久秀ハ西國ノ賈人ノ子ナリ、慧黠ヲ以テ長慶ニ親任セララル、○是歲

齊藤秀龍^{ヒデタカ}其主土岐定朝ヲ弑メ、其國ヲ奪フ、秀龍ハ西國ノ入賣油ヲ以テ業トナシ、初メ土岐賴藝ノ老臣、長井某ニ仕ヘ、既ニ之ヲ弑シ、遂ニ賴藝ノ重臣ト爲リ、山城守ト稱ス、是ニ至テ終ニ賴藝ヲ逐ヒ、定朝ヲ弑シ、美濃ヲ奪フ、難波ノ道三ト稱ス、○二十二年二月、上杉景虎、京師ニ朝ス、先是朝廷景虎ヲ彈正少弼ニ任シ、從五位下ニ叙ス、景虎曰、坐ナカラ官爵ヲ受ク、人臣ノ義ニ非スト、是月、兵二千ヲ率テ北陸ヨリ京師ニ入リ、先ツ關ニ詣リ、次ニ將軍ニ謁シ、五月、越後ニ還ル、村上義清、高梨政賴、須田親滿、島津規久等ノ諸將、信濃ヨリ來リ投ソ、曰、我輩武田晴信

ノ爲ニ侵掠セラレ、身ヲ置ク所ナシ、公ノ高義ヲ聞テ來リ歸ス、願クハ救援ヲ賜ヘト、景虎曰、僕ノ宿志、父ノ仇ヲ爲景加賀報シ、後ニ旗ヲ京師ニ樹ント欲ス、然レ諸君ノ託ヲ受ク、豈カヲ盡サ、ランヤ、○夏、武田晴信、小笠原長時ヲ拮据原ニ破ル、長時京師ニ奔リ、晴信盡ク信濃ヲ取ル、○三好長慶ノ弟實休^{ツギヒ}、其主細川持隆ヲ阿波ニ弑ス、○七月、義輝、三好氏ノ專恣ヲ苦シ、復タ細川晴元ヲ召シ還ス、晴元舊臣ヲ招集シ、入テ三好カ第宅ヲ焚ク、長慶之ヲ聞テ大ニ怒リ、八月、兵二萬ヲ引テ京師ニ入リ、堀川第ヲ攻ントス、義輝晴元復タ近江ニ奔ル、○十月、北條氏康兵

ヲ率テ攻テ古河城ヲ陷レ、晴氏ヲ執ヘテ之ヲ波多野ニ
放ツ、明年之ヲ釋メ關宿ニ置キ、其子義氏ヲ立テ、鎌倉
葛西谷ニ居ラシム、○十一月、上杉景虎、武田晴信ト河中
島ニ戰フ、景虎已ニ義清政頼等カ託ヲ受ケ、十月令ヲ下
メ兵ヲ小田濱ニ勒レ、八千騎ヲ以テ信濃ニ入リ、此月朔
進テ川中島ニ陣ス、晴信之ヲ聞テ援ヲ今川氏ニ請ヒ、兵
二萬ヲ率テ、兩宮渡ニ陣ス、山本晴幸等出テ、景虎ノ陣
ヲ覘テ曰、陣嚴ニノ兵銳ナリ、宜ク戰ハスノ之ヲ屈スヘ
シ、景虎數ク戰ヲ挑ム、晴信出テス、廿七日、景虎平賀宗助
ヲ遣リテ、明日會戰ヲ約ス、即夜ニ兵ヲ勒メ七隊ト爲シ

每隊七ヲ分チ、四十九隊合ノ圓陣ヲ作り、黎明下米宮橋
ヲ渡テ進ム、晴信二萬ヲ勒メ十四隊ト爲レ、陣ヲ嚴ニノ
迎ヘ戰フ、兩軍互ニ進ミ互ニ退キ、未牌ニ至テ勝敗決セ
ス、景虎兵ヲ分テ筑摩川ノ上流ヲ濟リ、武田ノ軍後ニ出
ツ、晴信ノ軍之ヲ見テ退走ス、景虎ノ兵乘ノ之ヲ擊ツ、横
田源助、武田大坊、板垣三郎、及ヒ今川ノ將朝比奈左京、武
田飛驒等ノ七人皆戰死ス、上杉ノ軍亦タ死傷多シ、各引
テ還ル、○廿三年八月、景虎又タ八千騎ヲ率テ信濃ニ入
リ、丹波嶋原町ニ陣ス、晴信亦タ二萬人ヲ以テ、貝津城ニ
入り、明日出テ、星ヲ對ス、十八日黎明越後ノ卒出テ草

ヲ為ル、甲斐ノ兵之ヲ追フ、村上義清兵ヲ伏セ、撃之ヲ職
ス、諸隊争テ出テ、遂ニ大ニ戰フ、真田幸隆保科弾正等ノ
軍、村上義清、高梨政頼カ軍ヲ撃テ之ヲ破ル、新発田尾張
杵原壹岐等又夕真田等ヲ撃テ之ヲ卻ク、幸隆創ヲ蒙ル、
兩軍酣戰スル、十七合、勝敗決セス、晴信中軍ヲ率テ、犀
川ヲ渡リ、芦荻中ヲ潛行レ、俄ニ起テ、景虎ノ麾下ヲ衝ク、
麾下敗レテ走ル、宇佐美定行、渡邊越中二千ヲ以テ、横ニ
晴信ノ軍ヲ撃ツ、晴信ノ麾下亦夕敗レテ走ル、晴信三十
騎ヲ從ヘ、河ヲ渡テ退ク、一騎有少白布ヲ以テ、面ヲ包ム、
馳突神ノ如ク來テ、晴信ニ河中ニ逼リ、大刀ヲ舉テ之ヲ

撃ツ、晴信刀ヲ抜クニ暇アラス、持スル所ノ麾扇ヲ以テ
之ヲ扞ク、扇中断ス、又撃テ其肩ヲ斫ル、從騎之ヲ助ケン
ト欲スレト、水急ニノ近ツギ難ク、原大隅槍ヲ以テ其馬
首ヲ打ツ、馬驚テ阻タル、晴信乃チ免ル、一ヲ得クリ、武
田信繁之ヲ見テ馳セ至リ、其騎ト河中ニ戰フ、騎刀ヲ舉
テ其髀ヲ断ツ、信繁馬ヨリ墜テ死ス、兩軍夜ル兵ヲ收メ、
武田ノ將士相謂テ曰、嚮キノ騎ハ荒川伊豆守ナリト、已
ニノ景虎ナルヲ聞テ皆切齒ス、○弘治元年十一月、毛利
元就、陶晴賢ヲ討チ、嚴嶋ニ戰テ大ニ之ヲ破リ、晴賢ヲ誅
ス、初ノ義隆ノ害ニ遇フヤ、終リニ臨テ書ヲ遺シ、元就ニ

○後奈良

囑スルニ復仇ノ事ヲ以テス、元就慨然トシ日夜賊ヲ誅
セシメテ謀リ、數々諸族ヲ會シ議ス、小早川隆景年二十
一、進テ曰、宜ク朝廷ニ奏請シ、大義ニ仗テ之ヲ討ツヘシ、
人心ノ嚮フ所、克クサルト無シ、元就之ニ從フ、朝廷乃チ
詔ヲ下ス、元就大ニ喜ヒ、書ヲ遠近ニ移ス、然レ賊ノ逆焰
方ニ熾シ、大兵ヲ以テ來リ攻メトス、元就諸子ト密カ
ニ議シ、誘テ之ヲ襲メ、謀リ、是歲五月、嚴嶋ニ城ク、諸
將諫レ、從ハス、六月、兵數百ヲ遣テ之ヲ守リ、草津櫻尾
ノ諸城ト、應援ヲ為サシム、己ニシテ宣言ノ曰、敵若シ嚴嶋
ニ據ルキハ我利ニ非ス、吾レ諸宿將ノ諫ヲ用非ス、失策

此ヨリ大ナルハ莫シト、晴賢之ヲ聞テ、兵三萬戰艦千餘
艘ヲ率テ嚴嶋ヲ攻ム、城兵死守ス、賊地道ヲ穿テ之ヲ攻
ム、樓櫓方ニ倒メトス、元就之ヲ聞テ自ラ精兵三千人ヲ
率テ、暗号ヲ定メ、一日ノ糧ヲ佩ヒ、暮ニ及テ舟ニ上ル、時
ニ大風雨衆ミナ怖ル、元就曰、是天助ナリ、風浪ヲ破テ渡
リ、舟ヲ北岸ニ返シ、必死ヲ示ス、隆景元春等亦夕來リ會
ス、天明、元就衆ヲ麾テ進メ、大ニ喊シ、賊陣ニ逼ル、賊軍大
ニ驚キ、走テ中營ニ集ル、營中嗔咽、進退スルコト能ハス、元
就ノ兵柵ヲ破テ突テ入ル、賊軍悉ク潰走シ、舟ヲ争テ溺
ル、者數千人、晴賢左右ト同ク逃レテ海岸ニ至ル、隻舟

ナシ、追兵亦夕逼ル、遂ニ自殺ス、弘中隆包等皆死ス、元就
己ニ晴賢ヲ誅シ、威関西ニ振フ、○三年春、元就兵ヲ將テ
周防ニ至ル、敵兵風ヲ望テ降ル、進テ山口ヲ攻ム、大内義
長、戰敗レテ自殺ス、於是周防長門備後安藝、皆元就ニ屬
ス、兵威益々熾ンナリ、○是歲九月五日、天皇崩ス、壽六十
二、

○正親町天皇 諱ハ方仁

後奈良天皇第十ノ皇子也、母ハ吉徳門院藤原氏、○十月、
天皇踐祚ス、関白前嗣故ノ如シ、○永祿元年、將軍義輝、三
好氏ノ乱ヲ避ケ、出テ、朽木ニ居ル、己ニ晴元ト勝軍

國史編年

山北白川ニ陣シ、三好ノ兵ト戰フ、六角義賢來リ援ク、利
アラズ、十一月、長慶ト和シ、京師ニ還ル、長慶入テ謁シ、遂
ニ晴元ヲ芥川ニ囚フ、歳ヲ踰テ卒ス、○武田信玄、上杉景
虎ト和ヲ議ス、先是弘治二年三月、信玄景虎復々川中嶋
ニ對墨ス、信玄山本晴幸ト夾擊ノ謀ヲ定メ、保科弾正海
野常陸介等十一將ニ、六千ノ兵ヲ授ケ、戸神山ノ峽路ヲ
經テ、越後ノ軍後ニ出シム、夜闇ク霧深シ、路ヲ失テ未タ
達セス、此夜景虎甲斐ノ陣ニ人馬響アリ、炊烟ノ起ルヲ
見テ其謀ヲ察シ、即チ令ヲ傳ヘ、八千騎ヲ率テ、筑摩川ヲ
渡リ、夜五鼓、大霧ニ乘リ、直ニ信玄ノ營ヲ衝ク、營中大ニ

○正親町 十四

乱レ、景虎ノ兵勢ニ乘ノ掩撃ス、甲斐ノ諸將、走者ヲ叱ノ
返リ戦ヒ、板垣駿河、山本晴幸、一條六郎、小笠原若狭、初鹿
野源五郎、諸角豊後等皆奮闘ノ死ス、甲斐ノ別將等、上杉
ノ營ニ達スレハ、空營人無シ、而ノ川中嶋ノ戦聲、天地ニ
轟ク、急ニ軍ヲ旋ラノ筑摩川ヲ渡リ、其後ヲ撃ツ、信玄亦
夕軍ヲ返レ、夾ミ撃テ之ヲ破ル、景虎急ニ軍ヲ收メ、圓陣
ヲ作テ退キ、甲斐ノ軍來リ逼ルヲ見テ、輪轉ノ返リ撃テ、
又追兵ヲ破ル、甲斐ノ後軍、横撃ノ之ヲ援ケ、越後ノ軍遂
ニ退ク、宇佐美定行、旗ヲ市川ノ渡口ニ樹テ、全軍ヲ濟メ
而シテ徐カニ退ク、信玄制メ復タ追撃ヲ許サス、迭ヒニ軍

ヲ收ム、八月復タ對壘ス、互ニ持重ノ戦ハス、交々退ク、兩
國ノ士民、連歲兵ヲ患ヒ、和ヲ議セルヲ願フ、今川義元
之ヲ周旋シ、是ニ至テ和議遂ニ成ル、○二年四月、上杉景
虎再ヒ京師ニ入ル、景虎信玄ト和スルヲ以テ、四隣虞ナ
シ、乃チ京ニ入り先ツ關ニ詣ル、天子酒ヲ賜ヒ、尋クニ寶
劔ヲ以テス、又義輝ニ謁ス、義輝之ヲ長慶ノ上ニ坐セシ
メ、偏名ヲ與テ輝虎ト稱シ、義輝、義輝ニ乘シ、朱柄麾ヲ執ル
ヲ許シ、三管領ニ比ス、景虎密カニ義輝ニ啓メ、曰、長慶專
横、不臣ノ志アリ、臣請フ撃テ之ヲ殺シ、義輝危シテ許
サス、景虎又前関白前嗣ヲ關東ニ奉セント請フ、之ヲ許

ス乃チ越後ニ歸ル。○齋藤義龍其父道三ヲ弑ス。道三其少
子ヲ愛シ義龍ヲ廢セシトス。義龍之ヲ怨ミ其弟ヲ誘ヒ
殺シ遂ニ道三ト戰テ之ヲ弑ス。信長兵ヲ率テ道三ヲ援
ス及ハス。○三年正月即位ノ礼ヲ行フ。毛利元就資ヲ獻
ノ儀ヲ助ク詔ノ之ヲ賞シ從四位下ニ叙シ大膳大夫ニ
任シ。菊桐ノ記号ヲ賜フ。○五月織田信長今川義元ヲ桶
峽ニ逆ヘ撃テ大ニ之ヲ破リ義元ヲ斬ル。是ノ時ニ當テ
今川義元既ニ駿河參河遠江ヲ定メ兵四萬五千ヲ率テ
尾張ニ入ル。鷺津丸根ノ守將使テ清洲ニ馳セテ急ヲ告
テ曰義元昨日菴懸ニ至リ明日將サニ兩城ヲ攻メトス。

信長諸將ヲ召メ計ヲ問フ。諸將皆曰敵兵五萬ニ近メ我
兵三千ニ過ス宜ク城ニ據テ銳ヲ避クヘシ。信長聽カス
メ曰先君言アリ隣國來リ攻ルルハ速ニ出テ戰フ可シ。
猶豫スルルハ將士心ヲ變ス吾レ先君ノ教ニ從ヒ明日
一戰ノ雌雄ヲ決スヘシト。因テ酒ヲ命メ諸將ト快飲シ酒
酣ニメ天明ク信長自ラ古謠ヲ謠テ起テ舞ヒ直チニ甲
ヲ擐シ單騎ニメ馳テ出ツ。熱田ノ祠ニ及フ比ホヒ屬ス
ル者千人乃チ戰勝ヲ祠前ニ祈テ山路ヨリ進メ行々諸
砦ノ兵ヲ收テ三千騎ヲ得タリ。東ヲ顧レハ鷺津丸根ノ
兩城已ニ陷リ黑烟天ヲ衝ク將士皆懼ル。信長顧ミス鞭

ヲ舉テ益々進ム、林通勝、柴田勝家、池田信輝、毛利秀高等皆諫テ曰、敵ノ勢熾此ノ如シ、之ヲ犯サハ必敗レシ、信長聲ヲ勵マノ曰、吾妾リニ進ムニ非ス、敵今二城ニ勝テ、吾ヲ侮テ必ス備ヲ設ケス、吾其不意ニ出テ、中軍ヲ襲フ、片ハ必ス克シ、梁田出、羽賛ノ曰、奇策必奇勝有リト、乃チ旗鼓ヲ伏セ、山ニ循テ馳テ桶峽ニ至ル、義元方ニ宴ヲ張テ首級ヲ檢シ、備ヲ設ケス、時ニ雷雨大ニ至ル、信長衆ニ先テ馳セ下リ、將士大ニ呼テ其營ヲ斫ル、營中驚乱ノ爲ス所ヲ知ス、服部小平太進テ幕中ニ入り、義元ヲ擊ツ、義元刀ヲ拔テ其膝ヲ斫ル、毛利秀高、義元ヲ鏖ノ其首ヲ斬

ル、衆大ニ呼テ曰、義元ヲ獲タリト、今川ノ前軍皆驚テ潰乱ス、信長進撃ノ其精兵二千餘級ヲ斬ル、乃チ軍ヲ返シ、熱田ノ祠ニ賽シ、義元ノ首ヲ馬前ニ掲ケテ、清洲ニ凱旋ス、士女路ヲ挾テ迎ヘ觀ル、於是信長ノ威名天下ニ震ス、○是役ヤ岡崎ノ城主徳川元康、今川氏ノ麾下ニ在リ、先是大高ノ守將糧竭ルヲ告ク、義元乃チ元康ヲメ糧ヲ入レシム、城ノ左右皆敵砦ナリ、衆皆之ヲ難カル、元康千騎ヲ以テ糧ヲ護シ、寺部梅坪ノ砦ニ向フ爲メ、火ヲ邑里ニ放ツ、鷲津丸根ノ兵烟ヲ望テ赴キ援ク、元康其間ニ衆入、麾下八百ヲ分テ三隊ト爲シ、糧ヲ大高ニ納テ還ル、時

二年十八、衆其智勇ヲ稱ス、是ニ至テ義元、大高ノ敵衝ニ當ルヲ以テ、守將ヲ撰ム、衆皆曰、元康其人ナリ、乃チ大高ヲ守ラシメテ、自ラ桶峽ニ陣ス、己ニメ敗レテ死ス、駿河ノ諸將、城中ニ在ル者、變ヲ聞テ皆逃ル、元康曰、其虚實ヲ審ニス可シ、若シ虚ナルキハ笑テ天下ニ取ン、水野、信元亦夕使ヲ遣ハノ來リ告ケ、速カニ城ヲ棄テ去シム、元康曰、信元我カ舅ナリト雖、敵將ナリ、輕信ス可ラス、即チ人ヲ遣テ偵ハシム、果ノ信ナリ、衆争テ退ントテ勸ム、元康曰、闇夜恐クハ道ヲ失ハン、月出ヲ待ツ可シ、頃ク月出ツ、乃チ兵ヲ整ヘテ還ル、○四年四月、上秋、輝虎大舉

メ北條氏ヲ攻メ小田原ヲ圍ム、先是、関白前嗣京師ヨリ來ル輝虎之ヲ至徳寺ニ館シ、兵ヲ發メ北條氏康ト、上野ニ戰テ之ヲ破リ、因テ上秋、憲政ヲ越後ニ迎ヘテ之ヲ厩橋ニ居ラシメ、尋テ兵ヲ遣テ古河ヲ攻メ、河越、関宿ノ諸城ヲ攻テ之ヲ拔ク、関東ノ豪傑、響ノ如ク應ス、是ニ於テ七十六將ヲ總御シ、兵九ソ十一萬進テ相摸ニ入ル、氏康議メ曰、輝虎勇悍絶倫ニメ、智慮短促、関東ノ將士、必ス服セサル者アラン、吾兵ヲ集メテ力ヲ抗セス、彼レ自ラ屈シテ退ント、悉ク八州ノ將士ヲ召メ、來テ小田原ヲ守ラシム、輝虎兵ヲ引テ來リ攻ム、技クテ能ハス、宇佐美定行

輝虎ニ説テ曰、大軍ヲ堅城ノ下ニ止メ、久シキハ恐クハ變有シ、輝虎之ニ從ヒ、退テ鎌倉ニ入り、鶴岡祠ニ詣ル、前嗣與ニ乘シ、輝虎騎メ從ヒ、將士前後ヲ衛ル、成田長泰、賴義ノ故事ニ循テ、馬ヲ祠前ニ立ツ、輝虎ノ從士、曳下ノ之ヲ打ツ、長泰恚リ告ケス、退キ去ル、諸將亦々叛キ去ル者多シ、輝虎遂ニ退テ平井城ニ入り、憲政ヲ以テ越後ニ歸ル、○九月、輝虎ノ小田原ヲ攻ルヤ、武田信玄、北條氏ノ囑ヲ受ケ、兵ヲ遣テ越後ノ境上ヲ焚掠ス、輝虎其和議ヲ破ルヲ怒リ、此月復々川中島ニ出ツ、信玄亦兵ヲ出メ、相持シ、遂ニ大ニ戰フ、輝虎不意ニ出テ、信玄ノ麾下ヲ

撃テ之ヲ破ル、武田義信、亦々襲テ輝虎ノ麾下ヲ破リ、互ニ勝敗アリ、十二日交々兵ヲ收ム、後千永祿七年、和議竟ニ成ル、天文廿二年ヨリ、兩氏兵ヲ交ル十二年、河島ノ戦諸書異同アリ、今五箇度合戦記ニ、外史亦此ニ據レリ○五年十月、天皇詔ノ使ヲ尾張ニ遣リ、密旨ヲ織田信長ニ賜フ、初メ京師ノ人宗繼、田産ニ富ミ、數々供御ヲ献ス、毎ニ朝廷ノ衰廢ヲ憂ヒ、嘗テ中納言惟房ニ説テ曰、尾張ノ信長年僅ニ二十、能ク小ヲ以テ大ヲ摧ク、天下ノ豪傑ナリ、宜ク綸旨ヲ請テ、囑スルニ撥乱反正ノ事ヲ以テスヘシ、是ニ至テ熱田ノ奉幣ニ託シ、宗繼及ヒ磯貝久次ヲメ、密旨ヲ齎シ、尾張ニ赴カシ

メ因テ御用ノ合香ヲ信長ニ賜フ、信長方ニ獵ノ歸リ之ヲ聞テ沐浴ノ衣ヲ更ヘ、出テ、教旨ヲ拜シ、宗繼ニ謂テ曰、萬乘ノ尊、及テ使命ヲ辱シ、加ルニ電貺ヲ以テス、微臣何ヲ以テ堪ヘン、當ニ天威ニ籍テ凶徒ヲ夷ラケ、不日ニ入朝シ、カヲ竭ノ報効ヲ圖ルヘシト、手ツカラ食ヲ調ノ、二使ヲ饗ス、○六年正月、里見義弘、兵ヲ下總ニ出シ、太田資正ト合テ江戸城ヲ襲ントス、北條氏康父子之ヲ聞テ小田原ヲ發シ、義弘ト鴻臺ヲ夾ンテ陣ス、是夜候騎報ノ曰、義弘ノ兵卻クト、平且氏康ノ先鋒、遠山富永ノ二將、兵ヲ引テ臺ニ上ル、義弘ノ將正木大膳、伏ヲ設ケテ之ヲ擊

チ、二將ヲ斬ル、餘兵皆走ル、氏康敗聞ヲ得テ再戰ヲ議ス、氏政曰、嚮ニ一卒ヲ遣テ敵中ニ混セシム、還リ報ノ曰、義弘臺上ニ在テ首級ヲ撿シ、意色太夕驕レリト、氏康曰善シ、日將ニ暮ントス、大霧咫尺ヲ辨セス、氏康父子自ラ先鋒トナリ、南北ヨリ鼓噪ノ上ル、義弘ノ軍大ニ驚テ潰エ奔ル、氏康自ラ薙刀ヲ揮テ三十騎ヲ斬ル、氏政等正木以下十八將ヲ虜ニス、義弘資正、僅ニ身ヲ以テ免ル、○八月、松永久秀、其主三好義長ヲ弑ス、時ニ長慶老病、恍惚トノ人ヲ知ラス、久秀元ヨリ義長ノ才武ヲ忌ミ之ヲ除ント謀ル、是ニ至テ之ヲ芥川ニ毒殺ス、○七年、織田信長、齋藤氏

ヲ滅シ岐阜ヲ取テ之ニ據ル信長已ニ密旨ヲ奉シ之ヲ
諸將ニ示ノ日夜西上ノ策ヲ議ス刈谷ノ城主水野信元
説テ曰公宜ク參河ノ徳川ニ結ヒ之ニ東事ヲ委シ西面
ノ天下ヲ圖ルヘシト信長之ニ從フ又武田信玄ト婚ヲ約
シ厚ク之ニ贈遺ノ而ノ美濃ヲ圖ル時ニ齋藤義龍已ニ
死シ龍興暗弱其將稻葉通朝トヨチカ氏家經國伊賀範俊款ヲ信
長ニ送ル於是信長三河ヲ攻ルト聲言シ兵ヲ率テ瑞龍
山ニ上リ井口城ヲ下シ見テ火ヲ縱テ急ニ攻ム城兵惶
駭シテ皆降ル乃チ龍興ヲ逐ヒ遂ニ美濃ヲ定ム徙テ井
口城ニ居リ各ヲ攻テ岐阜ト稱ス○八年五月松永久秀

等將軍義輝ヲ弑ス先是義植ノ孫義榮將軍ヲシテ
希ヒ情ヲ以テ久秀及ヒ三好政康康長岩成イハナリ左通ニ告ク
三人之ヲ三好ノ三黨ト稱ス三黨久秀ト之ヲ諾ス時ニ
義輝新第ニ徙ル門扉未タ成ラス久秀曰可ナリ此月三
黨及ヒ子久通等ト千人ヲ率テ京師ニ入り各一竹枝ヲ
佩ヒ清水寺ニ詣ルト宣言シ急ニ二條ノ第ヲ襲フ府中
大ニ驚キ宿直スル者一色秋成上野輝清以下三十餘人
鋒ヲ聯テ突テ出ツ義輝絶命ノ詞ヲ作テ姫入ノ袖ニ書
シ三十餘人ト奮闘シ賊ヲ殺ステ數十人徙兵皆死ス賊
池田某義輝ノ足ヲ斫テ之ヲ踏ス賊兵集ツテ障ヲ其上

ニ倒シ、槍ヲ攢ノテ之ヲ弑ス、義輝ノ母慶壽大ニ慟シ、火ヲ縱テ焚死シ、其姪亦々殺サル、賊池田目ヲ障ニ傷リ、終ニ皆メ廢人ト爲リ、食ヲ市ニ乞フ、京師ノ人、指ノ以テ弑逆ノ報ト爲ス、義輝時ニ年三十三、二弟アリ、周高シラウカカシケイ覺慶ト云、ミナ僧タリ、賊乃チ平田某ニ命メ、周高ヲ誘ヒ來リ、夷川ニ至ル、平田後ヨリ之ヲ斬リ殺ス、左右驚キ走ル、從者小四郎年十六、刀ヲ拔テ平田ト闘ヒ、遂ニ之ヲ斬ル、小四郎ハ京師ノ賈人、美濃屋ノ子ナリ、賊又兵ヲ遣テ覺慶ヲ守ル、細川藤孝フナタカ計ヲ以テ覺慶ヲ脱シ、近江ニ走リ、名ヲ義昭ト改ム、○冬、義榮從五位下ニ叙シ、左馬頭ニ任ス、尋テ

征夷大將軍ト爲ル、○九年、毛利元就、尼子氏ヲ滅ス、元就畠田城ヲ圍ム、茲ニ七年、四モニ其糧道ヲ絶チ、又關ヲ四方ニ置キ、榜メ曰、亡クル者降ル者、皆之ヲ殺ス、已ニメ城中糧竭ルヲ度リ、關ヲ撤シ、榜ヲ改メテ曰、亡クル者降ル者、悉ク之ヲ釋スト、於是城兵相踵テ逃降シ、餘ス所數百人、會々元就疾アリ、因テ義久ヲ招キ降ス、七月、義久遂ニ出テ、降ル、元就之ヲ安藝ノ長田ニ置ク、此ニ至テ山陰山陽ノ十州、悉ク元就ニ屬ス、○十年十月、天皇復々密詔ヲ信長ニ賜フ、時ニ、宗繼詔書ヲ齎メ來リ、且戰袍一領ヲ賜フ、信長村井貞勝ヲメ詔書ヲ讀シメ、戰袍ヲ拜メ曰、臣

京ニ入ルノ日、服メ以テ天恩ヲ拜ス可シ。○此月、三好ノ
三黨、三好義繼、松永久秀等ト隙ヲ生シ、互ニ相攻撃ス。○
十一年七月、足利義昭、美濃ニ赴テ織田信長ニ依ル。初メ
義昭ノ近江ニ奔ルヤ、六角義賢ニ依リ、其カヲ借リテ賊
ヲ討ンコトヲ求ム。義賢國ニ難アルヲ以テ辞ス、乃チ若狹
ニ往テ武田義統ニ依ル。國小ニメ事ヲ成スコト能ハス。又
越前ニ往テ朝倉義景ニ依ル。義景諾メ果サス。至是、信長
ノ威名ヲ聞テ、美濃ニ往ント欲シト者ヲメ筮センム吉
ナリ。乃チ使ヲ遣テ信長ニ説ク。信長方ニ西上ヲ計ル。喜
テ諾シ、之ヲ迎ヘテ立正寺ニ館ス。義昭乃チ信長ヲ見テ、

託スルニ興復ヲ以テス。信長答テ曰、是レ信長ノ方寸ニ
在リ、殿下復々患ルコト勿レ。義昭大ニ喜フ。○九月、織田信
長、義昭ヲ奉メ京師ニ入ル。先是、信長使ヲ遣テ、六角義賢
ヲ招諭ス。使者三反メ、義賢竟ニ聽カス。信長乃チ此月五
日ヲ以テ、將士ヲ岐阜ニ會ス。會スル者三萬人。義賢、義弼
已ニ三好ノ三黨ト謀ヲ通シ、箕作和田山等ノ十八城ヲ
修メ、兵ヲ分テ拒キ守ル。七日、信長諸軍ヲ率テ至リ、丹羽
長秀、木下秀吉等先鋒タリ、一鼓メ箕作ノ城ヲ拔ク。和田
山ノ城、風ヲ望テ潰シ、義賢、義弼、城ヲ棄テ、夜遁ル。信長
三日ニメ十八城ヲ下シ、悉ク近江ヲ定メ、明日湖ヲ濟テ

園城寺ニ陣ス、三好ノ黨大ニ畏レテ狼狽シ、京師ヲ棄テ、逃レ去ル、於是信長諸軍ヲ整ヘテ京師ニ入ル、天皇中納言惟房ヲメ、之ヲ迎勞セシム、信長稽首メ天恩ヲ謝ス、宗繼亦々從テ至ル、因テ服スル所ノ戰袍ヲ指メ曰、是レ嚮ニ賜フ所ナリ、信長美濃ヲ發メヨリ此ニ至テ十二日已ニ京ニ入ル、号令嚴明ニメ、秋毫モ犯ス所ナク、朝野帖然タリ、信長乃チ義昭ヲ清水寺ニ奉メ、自ラ東福寺ニ陣ス、○三好ノ黨、猶攝津河内ノ諸城ニ據ル、信長即チ柴田勝家、森可成等ヲ遣リ、萬人ヲ以テ、岩成左通ヲ青龍寺ニ攻メ、明日自ラ五萬人ヲ率テ之ニ繼ク、左通大ニ惧シ、城

ヲ以テ降ル、乃チ先導ト爲シ、三好政康ヲ苜川ニ攻メ、篠原長房ヲ越水ニ攻ム、二城皆潰エ走ル、進テ池田勝政ヲ攻ム、勝政策ヲ獻ノ降ル、高槻、茨木、飯盛、高屋ノ諸城之ヲ開テ皆降り、康長等惧レテ阿波ニ走ル、畠山高政、三好義繼、松永久秀等ハ、是ヨリ先ニ款ヲ納レテ皆降り、數日ヲ出スノ攝津河内悉ク平ラク、義昭ヲ越水城ニ奉シ、京師ニ歸テ清水寺ニ陣ス、京畿ノ將士爭テ來リ謁シ、鞍馬門ニ簇ル、先是義榮薨ス、朝廷乃チ義昭ヲ以テ征夷大將軍ト爲シ、信長ノ功ヲ賞メ、從四位下ニ叙シ、左兵衛督ニ任ス、信長辭ノ受ケス、乃チ彈正忠ニ任ス、義昭更ニ信長ヲ

以テ管領ト爲シ、副將軍ノ号ヲ賜ヒ、畿内ノ地ヲ揀ミ取
ラシム、信長又夕辞ノ受ス、吏ヲ界大津ニ置キ、関ヲ撤ノ
行旅ニ便ニス、遠近悦服ス、乃チ辞ノ岐阜ニ還ル、○十二
月、武田信玄駿河ヲ取ル、今川氏真出テ、奔ル、氏真聞弱
ニシテ國事ヲ恤ヘス、嬖臣三浦義鎮事ヲ用、井將士皆離ル、邦
俗中元ノ節ニ士女麗服踏歌ス、氏真尤モ之ヲ悦ビ、奢侈
ヲ極メ、國中靡然トシ、風ヲ成シ、冬ニ接ノ罷ム、士或ハ鞍
馬ヲ賣テ費ニ給ス、信玄之ヲ攻ム、氏真親ヲ將トシ、清見
寺ニ次ス、將士皆叛テ信玄ニ應ス、氏真退テ駿府ニ入テ
守備ヲ議ス、坐中一語ヲ出ス者ナク、退テ皆逃ル、信玄ノ

兵入テ府ヲ焚ク、氏真掛川ニ奔リ、朝比奈泰能迎テ城ニ
入ル、後遂ニ北條氏ニ依ル、○十二年二月、信長二條ノ第
ヲ修ム、其舊址ニ依テ東北ヲ拓キ、墮塹ヲ穿テ、以テ寇賊
ニ備フ、畿内及ヒ諸國ニ課ノ役ヲ助ク、四月、將軍義昭ヲ
ノ之ニ居ラレム、○五月、信長其將木下秀吉ヲ遣テ京師
ヲ護衛シ、皇宮ヲ修メシム、義昭已ニ二條ノ第ニ徙リ、信
長ニ謂テ曰、吾カ爲ニ智勇ノ將一人ヲ置テ、以テ京師ヲ
鎮スヘシ、信長諾シ、還ル、時ニ佐久間信盛、柴田勝家、丹羽
長秀、宿將ヲ以テ威望アリ、衆ミナ意ヲ三人ニ属ス、命下
ルニ及テ秀吉ナリ、衆皆大ニ驚ク、秀吉尾張ノ人、其母日

輪懷ニ入ルヲ夢ミテ、身ムコ有リ秀吉ヲ生ム、秀吉幼ニ
ノ英異、年十八信長ニ仕ヘ、韃ヲ撃テ以テ從フ、藤吉郎ト
稱ス、信長其敏才ヲ愛ノ、數ク之ヲ試ム、皆功アリ、清洲ノ
修壁洲股ノ築墨、衆ノ難ニスル所、之ニ屢ノ餘裕アリ、信
長遂ニ之ヲ將帥ニ列ス、衆皆之ヲ嫉ム、信長任用愈厚ク、
是ニ至テ此命アリ、秀吉既ニ命ヲ拜シ、性テ義昭ニ謁ノ
京師ノ事ヲ裁決ス、事皆立トコロニ辨シ、三好ノ黨屏息
ス、群臣其電過ヲ嫉テ數、之ヲ譖ス、信長斥ノ聽カス、時
ニ皇宮大ニ壞廢スルヲ以テ、信長之ヲ修治ス、秀吉及ヒ
村井貞勝ヲノエテ監セシム、○六月、尼子氏ノ遺臣、山中

幸盛、出雲ヲ復ス、初ノ義久ノビルヤ、幸盛逃レテ松永久
秀ニ依ル、時ニ經久ノ孫、僧ト爲テ東福寺ニ在リ、幸盛奉
ノ主ト爲シ、名ヲ勝久ト改ム、會々毛利元就、大友義鎮ト、
兵ヲ構テ鎮西ニ在リ、幸盛其空虚ニ乘シ、勝久ヲ奉メ出
雲ニ入り、新山ノ城ヲ取テ之ニ據リ、義故ヲ招募シ、連リ
ニ諸城ヲ拔キ、備前備後美作皆之ニ應シ、軍勢大ニ振ス、
幸盛出雲ノ人驍勇ヲ以テ著ハル、○八月、信長伊勢ヲ取
リ、北畠氏滅フ、信長兵五萬ヲ率テ、伊勢ヲ略シ、淺香城ヲ
取ル、北畠具教大河内城ヲ保ツ、進テ之ヲ攻ム、具教拒守
累月、城中糧盡キ和ヲ行ヒ、信長ノ子信雄ヲ請テ嗣ト爲

ス、信長之ヲ許ス、具教ノ族、木造具政、其弟雄利ト乱ヲ作シ、國大ニ乱ル、信長衆ヲ帥テ之ヲ討ツ、具教ノ將柘植某具教ヲ殺メ降ル、信長其大逆ヲ責テ之ヲ斬ル、諸將皆降り、勢州平ラシク、○元龜元年四月、信長朝倉義景ヲ攻テ、手筒金崎ノ二城ヲ拔ク、信長ノ義昭ヲ納ル、ヤ、義景兵ヲ擁ノ至ラス、義昭職ヲ嗣グニ及テ、之ヲ招ク又至ラス、信長怒リ、是ニ至テ、越前ニ入り二城ヲ拔ク、淺井長政、叛テ義景ニ應シ、兵ヲ近江ニ舉ク、信長兵ヲ引テ還ル、長政ハ信長ノ姉婿ナリ、○六月、信長朝倉義景、淺井長政ト姉川ニ戰テ、大ニ之ヲ破ル、信長、長政カ已レニ叛クヲ怒リ、兵

三萬五千ヲ發シ、援ヲ徳川家康ニ乞ヒ、兵ヲ合メ先ツ横山城ヲ攻メ、龍鼻ニ陣ス、長政援ヲ朝倉ニ乞フ、朝倉景健兵一萬ヲ以テ之ヲ援ケ、大寄山ニ陣ス、信長夜ル大寄山ヲ望テ諸將ヲ召メ、曰、北軍炬火宵ニ徹ス、是レ曉ニ乘ノ我ヲ襲ント欲スルナリ、乃チ兵ヲ分テ十三隊ト爲メ、長政ニ當リ、家康其部兵五千ヲ以テ、景健ニ當リ、稲葉通朝之ヲ助ケ、天明北軍ニ姉川ト遇フ、長政ノ先鋒流ヲ乱テ進ム、勢甚タ銳、信長ノ兵退キ走ル、信長兵ヲ麾テ横ニ之ヲ撃ツ、長政ノ陣乱ル、景健亦夕全軍ヲ以テ進ク、家康ノ前隊敗レテ退ク、家康麾下ヲ以テ之ヲ兼ケ、左右ノ翼ヲ

縦テ大ニ之ヲ破ル、通朝勝ニ乗メ横ニ長政ノ軍ヲ衝テ、
大ニ之ヲ破リ、斬首三千餘級、其驍將遠藤真柄等十餘人
ヲ斬ル、初メ長政ノ信長ト婚ヲ結フヤ、信長來リ見ル、長
政之ヲ成、喜提院ニ饗ス、遠藤直繼長政ニ謂テ曰、信長梟
雄、必ス我カ患ヲ爲シ、今之ヲ圖ルハ、臣一人ノ力之ヲ
辨セシ、長政聽カス、直繼機ヲ失フヲ憾ミ、是ニ至テ潛カ
ニ信長ノ麾下ニ混レ入り之ヲ刺ントス、竹中久作カ爲
ニ殺サル、○九月、三好ノ黨齋藤龍興ト兵ヲ舉ケテ、阿波
ヨリ攝津ニ入り、野田福嶋ノ城ニ據ル、信長兵ヲ率テ之
ヲ討テ、天満林ニ陣シ、將軍義昭中嶋ニ次ス、時ニ本願寺

ノ光佐、大坂ヲ以テ賊ニ應ス、信長佐々成政等ヲ遣テ之
ヲ拒ム、我軍利アラズ、將士死スル者多シ、前田利家殿ノ
退キ、自ラ數十人ヲ磔シ、賊乃チ卻ク、朝倉淺井ノ二氏之
ヲ時トノ兵三萬ヲ合シ、比叡衢ニ陣ス、森可成拒戦ノ之
ニ死ス、長政等進テ醍醐山科ヲ焚ク、信長之ヲ聞テ、義昭
ヲ奉メ京ニ還ル、敵亦ク退テ叡山ニ屯ス、信長乃チ諸將
ヲ遣テ之ヲ圍ミ、使テ遣テ僧徒ヲ招諭ス、僧徒等聽カス、
已ニノ木下秀吉、丹羽長秀兵ヲ率テ來リ援ク、信長大ニ
喜テ、長政等數ク和ヲ乞フ、義昭又ク和ヲ講セシム、諸將
皆引テ還ル、○十月、北條氏康卒ス、子氏政嗣ク、氏康下ヲ

馭スルヲ寛緩能ク衆心ヲ得タリ、每戰身ヲ以テ敵ニ當テ其功ニ矜ラス、故ニ士風皆廉讓ヲ尚ム、尤モ心ヲ政治ニ用ク、関東ノ諸國賴テ以テ安シ、○二年六月、毛利元就卒ス、孫輝元嗣ク、元就幼ニシテ大志アリ、嘗テ嚴嶋ノ祠ニ詣ル、歸テ從者ニ問テ曰、汝カ輩何ヲカ祈ル、曰、郎君ノ安藝ニ主タルヲ祈ル、元就曰、汝何ソ吾カ天下ニ主タルヲ祈ラサルト、時ニ年十二、衆其量ニ服ス、是ニ至テ疾篤シ、輝元遺言ヲ請フ、曰、汝ニ叔ヲ視ル、我ヲ視ルカ如クセハ、長ク我業ヲ守ル可シ、ニ叔ハ元春隆景ヲ謂フ、卒ス年七十五、又和歌ヲ善シ、集アリ世ニ行ハル、時ニ元春出

雲ニ在リ、元就ノ訃ヲ聞テ、哭シ將士ニ謂テ曰、葬莫ノ任ハ隆景アリ、吾敵ヲ勦ノ以テ靈魂ヲ慰セント、乃チ伯耆ヲ攻ムト聲言シ、急ニ末石ノ城ヲ攻ム、幸盛出テ降ル、後疾ト伴リ、廁中ヨリ逃ル、元春又新山城ヲ攻テ勝久ヲ走ラス、勝久幸盛ト遂ニ信長ニ歸ス、○九月、信長叡山ヲ焚キ、僧徒ヲ捕テ悉ク之ヲ斬ル、信長素ヨリ僧徒ノ横肆ヲ惡ミ、去年ノ役ニ招諭スレドモ聽カス、敵兵ノ盛ナルヲ以テ之ヲ優容ズ、是ニ至テ近江ヲ畧シ、新村小川ヲ取テ勢多ニ陣シ、諸將ニ命ノ叡山ヲ焚シム、諸將愕然タリ、佐久間信盛等諫テ曰、桓武帝興寺ヲ創ノヨリ、今ニ至テ王城ノ

鎮タリ、今之ヲ滅ス。如何シ、信長曰、吾天下ノ為ニ國賊
ヲ除クノミ、吾皇道ノ衰ヲ興メ、天下ヲ安セント欲ス、彼
カ輩律ヲ破リ政ヲ乱リ去年使ヲ以テ禍福ヲ陳スレバ
彼竟ニ服セス、反テ凶徒ヲ助テ王師ヲ梗ス、是國賊ニ非
スノ何ソヤ、且ツ彼カ輩酒肉ヲ御ノ妻妾ヲ蓄フ、安クン
ソ王城ヲ鎮スルニ在ント、遂ニ叡山ヲ圍ミ、中堂及ヒ二十
一社ヲ焚キ、僧徒婦女童幼ヲ併セテ、悉ク之ヲ斬ル、山谷
為ニ空シ、乃チ志賀郡ヲ以テ明智光秀ニ與ベ、坂本ニ城ヲ
之ニ居ラシム、○是歲皇宮成ル、殿堂門廡悉ク舊制ニ依
リ、壯麗觀ツ可シ、信長又金ヲ豪戸ニ借レ、其息ヲ以テ供

御ニ供ス、廷臣ノ産ヲ失フ者、往々舊ニ復シ、閑征ヲ顯キ、
徭役ヲ弛ヘ、商旅相通シ、士民大ニ悦フ、○冬、武田信玄遠
江ヲ侵ス、徳川家康援ヲ信長ニ乞フ、信長佐久間信盛平
手沱秀等ヲ遣ル、十二月、信玄兵四萬ヲ勒メ進テ三形原
ニ陣レ、火ヲ濱松城外ニ縱テ戰ヲ挑ム、家康出テ、戰ニ
ト欲ス、諸將皆諫ム、信玄退テ井伊谷ニ入ル、家康出テ、
三形原ニ陣レ、兵八千ヲ分テ九隊ト爲ス、日己ニ晡ナリ、
小山田昌行信玄ニ謂テ曰、徳川ノ陣薄フノ、織田ノ陣整
ハス、破ル可シ、信玄乃チ旃ヲ旋ラス、徳川ノ將鳥居忠廣
敵ノ狀ヲ視テ歸テ曰、信玄軍ヲ返ス、陣堅ク勢銳シ、戰必

○正親町 三十五

ト

分々
ヨリ

ス利アラス、渡邊守綱亦歸リ報ノ曰、敵銳ナリ戰フヲ勿
レ、家康聽カス、本多忠勝、榊原康政等ニ命レ、敵ノ先鋒小
山田昌行カ軍ヲ撃ツ、昌行走ル、家康亦々麾下ヲ以テ、山
形昌景カ陣ヲ撃テ之ヲ走ラス、武田勝頼、馬場信房之ヲ
兼ケ直チニ家康ノ麾下ヲ衝ク、信玄又々米倉丹後ニ命
レ、奇兵ヲ縱テ横サマニ之ヲ撃ツ、參河ノ軍遂ニ大ニ敗
レ、信盛走リ沱秀死ス、家康切齒メ衆ヲ勵マシ、成瀬正義
鳥居忠廣以下死スル者二百餘人、敵兵勝ニ乘リ益々逼
ル、家康返リ戰テ死セント欲ス、夏目正吉諫テ曰、大將命
ヲ授ルノ時ニ非ス、臣請フ代テ死セント、鎗ヲ以テ其馬

ヲ打ツ、馬驚テ走ル、正吉追兵ヲ遮リ奮戰ノ死ス、家康走
テ城ニ入ル、時已ニ夜ニノ天寒ク雪下ル、命ノ篝火ヲ設
ケ、諸門ヲ開カレム、都築秀綱ノ妻粥ヲ煮テ士卒ニ供ス、
家康一飽ノ時鼻息雷ノ如シ、敗兵皆城ニ入ル、信玄ノ
兵亦來リ逼ル、其伏アルヲ疑テ退ギ去ル、甲斐ノ諸將、濱
松城ヲ攻ント欲ス、高坂昌信之ヲ諫ム、信玄之ニ從ヒ、退テ
刑部ニ次ス、

國史攬要卷之八
終